

2021. 12. 19 (日) マタイ 2 : 1 ~ 12

- 2:1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。
- 2:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」
- 2:3 これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。
- 2:4 王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。
- 2:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。
- 2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』」
- 2:7 そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞いた。
- 2:8 そして、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出した。
- 2:9 博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。
- 2:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。
- 2:11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。
- 2:12 彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。

#### <説教>

先主日には、神がマリアに対して、神の子、永遠の王、支配者であるイエスを聖霊によって身ごもり産むという喜ぶべき特別な恵みを与えてくださったことを見ました。

本日の聖書には、その同じ神が異邦人・異教徒である〈東方の博士たち〉に対して、生まれたイエスに会い、イエスを礼拝するというこの上もない喜び、特別な恵みを与えてくださったことが記されています。

〈イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになった〉(1)とは、イエスは本当の人間(皆、歴史的に特定の時に特定の場所で生まれる)だということです。

もちろんそれは神の「定めの時」(ガラテヤ 4:4.新改訳第三版)に、定め場所で(すぐ後の箇所では民の祭司長たち律法学者たちが言っているように)、でした。

ヘロデが「ユダヤ人の王」だった時代は B.C.37 ~ 4 年であり、イエスがお生まれになったのはヘロデが死ぬ B.C.4 年の 1 ~ 2 年ほど前だったと考えられています。

ヘロデはローマ皇帝やその他ローマ帝国の支配者に取り入り(賄賂を送ったり、ローマの敵と戦い戦果をあげたり、その他あらゆる手を尽くして)、「ユダヤ人の王」という地位と呼び名をローマ帝国(皇帝と元老院)から与えられたのです。

その地位を守るためなら人殺し（他人はもちろん、親族、妻、子までも）だろうと何だろうとヘロデは文字通り何でもして来たし、これからもしようとしていたのです。

そんなヘロデがいたエルサレムに、〈東の方から博士たち〉が〈やって来て〉(1)、〈ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。〉(2)と爆弾発言をしたのです。

〈東の方〉とは、バビロンとかペルシャ地方、現在の国で言うならイラクとかイランあたりのどこかではないかと考えられています。

〈博士〉(G:マゴス)はマジック(魔術)と関係のある言葉ですが、彼らは怪しげな魔術師というわけではなく、〈星が昇るのを見た〉と言っているように現代で言うところの天文学者であり(占星術も心得ていたようですが)その他医学、自然科学、宗教など多くの分野に詳しい知識人、知恵者でした。

かつてバビロン捕囚もあり、〈東の方〉でもユダヤ人の宗教のことは知られるようになっていたでしょうから、ユダヤ人が〈ユダヤ人の王〉なる救い主を待ち望んでいたことなど〈博士たち〉も当然知っていたと思われまます。

そんな彼らが〈ユダヤ人の王としてお生まれになった方〉の〈星が昇るのを見〉て、異教徒なのに、その方を〈礼拝するために〉わざわざ遠いところを長旅をしてユダヤのエルサレムまで来たのです。

これは神から来たことであり、彼らに対する神の恵みのみわざと言うほかありません。

〈王として〉とは「王にこれからなる」というような未来形ではなく、今、現在「王である」という現在形で表現されています。

しかもそのヘロデでない〈ユダヤ人の王〉を〈礼拝するために来ました〉と言うのですから、〈これを聞いてヘロデ王は動揺した〉(3a)のも当然と言えるでしょう。

〈ユダヤ人の王〉を名乗ることはヘロデ王に対する反逆になります。

同時に、ローマ帝国の許可無く〈ユダヤ人の王〉を名乗ることはローマ帝国への反逆にもなりますから、そんな者をヘロデが放っておくなら、今度はヘロデがローマ帝国からにらまれ、ヘロデの地位と命が危なくなってしまうます。

とにかく新たな〈ユダヤ人の王〉誕生の告知をヘロデは喜ばず、反対におびえ、取り乱し、同時に怒り、ねたみ、保身の情念がめらめらと燃え上がったのでした。

ヘロデの執念深さ、残酷さを知っている〈エルサレム中の人々も王と同じ〉く、〈動揺〉し、ヘロデが何をするのか、自分たちがとぼっちを受けないかおびえたのでした。

ヘロデから〈みな集め〉られ〈キリストはどこで生まれるのかと問いただ〉された〈民の祭司長たち、律法学者たち〉は預言者ミカの言葉を引いて〈ユダヤのベツレヘム〉だと答えました。(4-6)

〈そこでヘロデは博士たちをひそかに呼んで〉、ベツレヘムのことを伝え、〈彼らから、星が現れた時期について詳しく聞〉き、〈「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と〉大嘘を〈言〉って、彼らをベツレヘムに送り出し)ました(7-8)。

ヘロデは策略を巡らして自分が博士たちを〈ベツレヘムに送り出した〉と思い、博士たちもヘロデの策略を知らないままに、〈王の言ったことを聞いて出て行き〉(9)ました。

しかし〈かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるとこ

ろまで来て、その上にとどまった。) (9) ことから、本当は神が彼らを導いてベツレヘムに送り出し、彼らを出て行かせなされたのです。

その星を見た彼らが〈この上もなく喜んだ(直訳:非常に大きな喜びを喜んだ)〉(10)、その大きな喜びは神から来たのであり、神が与えてくださ喜びでした。

博士たちは〈家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。〉(11)のです。

〈贈り物〉はどれも高価なものであり、〈黄金〉は正に王に相応しく、〈乳香〉は礼拝で神に献げるもの、〈没薬〉は遺体を埋葬するときに用いられました。

彼らは〈幼子〉イエスが王であり、神であり、死ぬお方(殊に罪人のために)即ち救い主であることを不思議にも知って信じていたのです。

〈ユダヤ人の王としてお生まれになった〉〈幼子〉イエスが異教徒であった彼らの王でもあり、神であり、救い主であると彼らに教えてくださったのは神であり、神のこの上もなく大きな恵みでした。

〈ひれ伏して礼拝した〉とは、自分たちの命も知恵も持っているすべてはこの目の前にいる〈幼子〉イエスがくださいましたという告白であり、命も知恵も持っているすべては〈幼子〉イエスのものです、それゆえすべてイエスにお献げしますという告白でした。

そのように彼らはこの上もない非常に大きな喜びと感謝をもって〈幼子〉イエスを礼拝し、惜しまずに献げ物をしたのです。

そんな彼らはもはやヘロデ王の命令に従う必要はなく、神は不思議な方法で彼らを(ヘロデの罪に加担することがないように)守り導いてくださいました(12)。

イエスはヘロデのように他人を殺すのではなく、ご自分が私たち罪深い者のために死なれ、よみがえられて私たちを生かす救い主であり、私たちを支配なさる王であり、私たちが信じ、すべてを献げて礼拝すべき神なのです。

そのキリスト・イエスを礼拝するのが「キリストのミサ(礼拝)即ちクリスマスです。ですからクリスマスは季節限定ではなく、私たちの生涯をかけてのことなのです。